
繰り返して往く世界の中で(まどマギ×学園黙示録)

NODFG

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

繰り返して往く世界の中で（まどマギ×学園黙示録）

【Nコード】

N4730T

【作者名】

NODFG

【あらすじ】

彼女は、繰り返してきた。

幾度と無く繰り返し、「彼女」を救うために全てを費やしてきた。その果てに彼女が見たものとは――

第一話「奇跡を願った、代償は」(前書き)

当作品は「魔法少女まどかマギカ」と「学園黙示録H・O・T・D」のクロスオーバー作品です。

原作崩壊・クロスオーバー・キャラ崩壊・グロ要素などが苦手な方はブラウザバック推奨。

作者は当作品が初投稿の作品となりますので、誤字脱字など暖かい目で見ていただけると幸いです。

第一話「奇跡を願った、代償は」

——何度も、何度も繰り返してきた。

彼女を救うために。

何度も。

何度も。

ああ、何時になれば救われるのだろうか？

そんな疑問を抱いたのは何時だったろうか。

それでも私は抗い続ける、私の為に、彼女の為に。

待ってて、いつか、助けてあげるから——

わたしの、たったひとりの、最高の友達。

第一話「奇跡を願った、代償は」

「暁美ほむらです、よろしく願いします。」

私の口から、聞きなれた台詞が飛び出している。

もう、何度目になるだろうか。

彼女を救うため、私は何度もこの世界を繰り返してきた。

だけど、彼女は救われない。

災厄と成った彼女を背に、私は何を思っただろう？

今となっては、遠い昔の事に思える。

しかし今は、彼女がいる。

視界に見える彼女の顔を見て、私は決意を固めた。

「暁美さんは、先日まで…」

これも聞きなれた台詞。

しかし、どこか違和感がある。

この違和感は何処から来るのか…

自分ではない、では何処から？

しかしそれが何か気が付く事は無く、私の「日常」は始まった。

グオアアアアオッアアアツ…

普段と同じく「魔女」を消し去る。

これが何の果ての姿か、私は全て知っている。

その上で私は「彼女」らを討つ。

贖罪はしない。

それが私の生きる道だから――

「…ふう。手強かったわね。」公園の椅子に腰掛ける。

数日前から私にはある悩みがある。

私が悩むのは、彼女をこの世界に巻き込むか否か、だ。

何もしなくても優しい彼女の事だ、あの魔女を前に契約しない、という事はないだろう。

かつて誰にも頼らなかったあの時間軸…

彼女はそこでさえ契約から逃れる事は出来なかった。

それならばむしろ早めに関わらせておくべきか、とも思ってしまう。

――こう考えていてはきりが無い。

私はグリーンシードを拾い、そこから立ち去った。

数日後、この世界が私の想像をも超える世界となる事も知らずに…

第二話「たとえ絶望に吞まれようとも」(前書き)

黙示録側の原作キャラは、しばらく出てこない予定です。
暫くは世界観を借りることになる気がします。

第二話「たとえ絶望に吞まれようとも」

——その日。

後世に「Xデー」などと呼ばれる運命の日。

多くの人々が死に、絶望し、そして喰われていった。

この日から、世界は「奴ら」に支配された。

逆らう生者は、圧倒的な「奴ら」の数に吞まれ、そして生命の灯を失った。

この狂った世界に、

奇跡は、魔法は在るのだろうか——

第二話「たとえ絶望に吞まれようとも」

転校から一週間。

今日も私は優等生を演じる。

あれから考えたが、彼女とはまだ接触していない。

——未だにこの時間軸での私の行動基準が決まっていない。

確か最初のうちは、目が覚めて遅くとも一日以内には決めていた。自分の意思―目的―が薄れていく感覚。

これは「繰り返し返した」弊害なのかどうかは分からない。

でも、私はもう止まれないから――

もし止まったら、恐らく私のソウルジェムは持たないだろう。

何時からだろうか、私が彼女を救うのではなく、彼女に救って欲しいと思う自分がいる。

これはきつと罰。

あの日、魂と引き換えに一人の少女の命を弄んだ、私への罰。

ふと、チャイムが鳴る。

いつの間にか授業が始まっていたようだ。

考えを一旦止めて授業の用意をする。

といってもこの授業も何度受けただろうか――

ふと気を外に向けると、何やら揉め事が起こっているようだ。

校舎の外から何やら音がする。

物が千切れるような音――聞き慣れた、死の音。

「鹿目さん、走ってっ」

「えっ、ほむらちゃん、何でっ」

その音を聞いた途端、私は咄嗟にまどか―大切な友達―の手を取り、走り出した。

後ろから誰かの制止の音がする。

でも私は止まらない。

何か、ここにいては大変な事になる気がするから。

「ほむらちゃん、いきなりどうしたの？」

隣を走るまどかが聞く。

「勘よ。何か大変な事になる気がするの。」

そう、今走っているのは勘でしかない。

危険な事が起きるとは限らないし、むしろ起らない方がいい。

それにそんな事が起こる証拠なんて私が聞いた音くらいしか無い。まさに勘と言っているだろう。

しかし彼女の長年の経験はこれを危険ととらえた。

それ故の逃走である。

「まずは何か起こったのかどうか、屋上に出て確かめるわ。
着いてきて。」

そう言うとは私は屋上へと繋がる扉を開いた。

「ひっ——」

誰の、声だったろうか。

眼前には、絶望が広がっていた——

第三話「それでも、進むしか無いから」(前書き)

前話より少し短めです。

誤字脱字、描写不足などありましたらお気軽にどうぞ。

第三話「それでも、進むしか無いから」

——その日、彼女が見たモノは果たして絶望だったろうか

或いは、それは救いだったかもしれない

絶望の底にこそ希望は生まれる

果たして匣を開けたのは誰だったか——

第三話「それでも、進むしかないから」

——一瞬、目を疑った。

それは、地獄だった。

「いやっ…来ないでえっ…いやぁアアアアアオアアアア」

妙齡の女性が生気を失ったモノに喰われ

「やめろ、どうしたんだ急に…グッ、ガァァッ…」

友人を止めようとした男性は首を噛み千切られ

「うっ…」

思わず吐き気が込み上げてくる。

過去の時間軸でもここまでのものは見たことが無かった。

…ッ、まどかは？

「いやだよ、こんなのってないよ…」

その場に崩れ落ちるまどか。

駄目だ、連れて来るべきではなかった――

一瞬そんな考えが頭をよぎる。

彼女は優しい。優しすぎる。

そんな彼女にこの光景は酷だ。

「まどかつ…」

「ほむら…ちゃん…？」

「ごめんね、まどか…」

「私は…大丈夫だから、ほむらちゃんは、他のみんな…さやかちゃん達を…」

こんな時でも人の事を…

まどか、貴女は…

「…ッ、いいわ。鹿目さんはここで待ってて…」

貴女は私が守るから。

待ってて、まどか。

私は、もう止まらないから――

まどかと別れて校舎に戻る。

教室に足向けながらも、私は外にいたモノの事を考えていた。

あれは既に死んでいるヒトだ――

本能はそう訴える。

しかし理性はそれを否定する。

だが、その以前に自分は既に死んでいるではないか。

佐倉杏子の言葉を思い出す。

…確かに、そうね。

本当はああいふモノを「ゾンビ」とか言うみたいね…

理性が現実を直視した。

認めなければならぬ。

あれらが、俗に言う「ゾンビ」と等しい存在であると。

「美樹さやか。少しいいかしら？」

教室に入ると同時に彼女の手を引き、屋上へ向かう。

「え？急にどうしたのさ、転校生…

ハッ、まさか私に一目惚れっ？」

「そんな訳無いでしょう。

美樹さやか。屋上に鹿目まどかがいるわ。行ってあげなさい。」

それだけ言い残すと、私は上級生の教室へと走り出した。

第四話「きっと、あなたはそこにいるから」(前書き)

やっとマミさんが絡んできます。
なかなか執筆時間が取れない…

第四話「きっと、あなたはそこにいるから」

——いつから、世界はこんなにも狂ってしまったのだろうか？

「あの日」から？

そうだとも言えるし、そうでないとも言える

いずれ死者と生者の境界は無くなり、わたしたち生者はかれら死者となる

それが世界の決まりなのならば、

——私はそれを越えてみせよう。

第四話「きっと、あなたはそこにいるから」

ある人を探して、私は疾走する。

この偽りの平穏が壊れてしまう前に——

――巴ミミ。

かつての私にとって、先輩であり、仲間であった人。

そして、私が彼女と共に生き延びた時間軸は――

存在しない。

ある世界では頭を食い千切られ、

ある世界では真実に耐えきれず壊れ、

またある世界ではその命を仲間の為に散らし――

だからだろうか。

私が、柄にもなく「彼女も救ってみせよう」だなんて考えたのは――

上級生の校舎に着いた、が気配がおかしい――

肉片。

死骸。

頭蓋骨。

血液。

内臓。

眼球。

そして――

死者と、銃声。

「――ッ、遅かった。」

私は懷から宝石のような物を取り出すと、それに力を込めるようにイメージする。

一瞬の後、私の姿は変わり、左腕には見慣れた盾のような物が装着された。

素早くその内部から拳銃―D e s e r t E a g l e 5 0 . A E
―を引き抜くと、地獄へと走り出した――

外伝「生きるための、道しるべ」(前書き)

外伝その一。

マミさん側の視点です。

外伝「生きるための、道しるべ」

——普段通りの教室。

——普段通りの授業。

そして私——巴マミ——は、普段と同じよう授業を受けつつ、収まらない空虚感を抱いていた。

毎日、魔女と呼ばれる災厄を狩り続ける。

——わたし、一人で。

幾ら仕方がないと納得しようとも、この空虚感が消えない。

私にあの契約を提示した生物を恨もうにも、あれは私の意思。

「生きたい。」

果たして私は、あの時契約すべきだっただろうか…

「はい、ではこの問題を…」

先生の声が聞こえる。

ふと耳を澄ますと、二つ隣の教室から、小さな悲鳴が聞こえた気がした。

「…どうしたのかしら。」

その疑問の解は、数秒後に分かる事となる――

外伝「生きるための、道しるべ」

「いやあああああつ」

突如隣の教室から悲鳴が上がった。
一体何が…

「う、うわあああつ」

「来るなっ、来るなああつ、ガッ…」

：何かが起こったようね。
まさか、魔女？

そう思っていると、教室の扉が押し開けられ、脇腹を挟られた生徒が入り込んできた。

「痛い：いやだ、しにたくない：」

「：ッ大丈夫？ 早く救急車をつ」

「ぐう：カハッ」

「早くっ急いでっ」

近づいて、見てみる。

彼は既に死んでいた。

瞳孔も開き切っていたし、鼓動も止まっていた、筈なのに：

「先生、彼が起き上がりましたっ」

「良かった、早く病院に：」

私は、次の光景を一生忘れないだろう。

突如先生に噛みついたかと思うと、肉を抉り取った。

「：えっ？」

「いやああああっ」

逃げまとう生徒が、次々と喰われていく。

隣の教室から、次々化け物がやってくる。

「ひっ…」

思わず腰が引けた。
そこに迫る怪物――

一発、銃声がした。

右手を見ると、知らぬ間にマスキット銃を掴んでいた。
そうだ、私には力があるんだ――

生きるための、力が。

第五話「何の為に、己が為に」(前書き)

スピーディーさの表現が出来ない…

第五話です。短いかな？

5／27

微修正

第五話「何の為に、己が為に」

——この世界の、かつての価値は崩れ去った。

生き残った者こそ勝利者であり、それ以外は敗者として食料となる。

——かつての価値など、意味がない。

クラスメイトなど、

友人など、

家族など、

恋人など、

全ては過去の遺物となる。

「敵」ならば倒す。

それが生き残るために必要だとして、

あなたは勝利者になりますか？

第五話「何の為に、己が為に」

「ふっ——」

向かって来た死者の頭を撃ち抜く。

この校舎は既に死者の巣窟となっているようだ。

先程銃声がした場所まであと少し。

私はその教室へと、足を進めた——

「…誰も、いない？」

まさか、そんな筈は——

私の脳内に幾つかの仮説が立つ。

彼女も死者となってしまうたのだろうか？

ふと部屋を見渡すと、端に見慣れた物が落ちていた。

「彼女の…銃、ね。」

そこに落ちていたのは見慣れた装飾銃。
かつての仲間が使っていたものだ。

弾薬は入っておらず、恐らく先程の銃声はこれに依るものだろう。

「…涙の、跡？」

その装飾銃の横には、彼女が流したであろう涙の跡があった。

「まさか、彼女は――」

最悪の予想が頭を占める。

「わたしは、…ッ」

――それは、かつての世界。

仲間を救うために、彼女は命を失った――

私の喉から嗚咽が漏れる。

きつと、助けられた筈なのに。

暫く其処で立ち尽くしていると、隣の校舎から悲鳴が聞こえた。

不味い、まどかが――

走る、走る、疾る――

私は持ちうる力を使いきるかの如く、全力で彼女の元へと向かって
いる。

彼女に死なれるわけにはいかない。

私は、彼女の為に生きていようなものだから――

近づく死者を撃つ。

くっ、あまりにも数が多い――

私は盾の中に拳銃を収納し、新たな武器――M16A2――を取り出した。

引き金を引く。

激しいマズルフラッシュと共に、死者は数を減らしてゆく。

しかし、減らしているにも関わらず、死者はまるで私を囲うかのよう
に集まってくる。

「まさか、音に――」

ひたすら撃つ、撃ち続ける。

「っ、マガジンが…」

遂に弾薬が無くなった。更に先程から銃身が加熱して来ている。今の状況では新たにマガジンを取り出す時間も無く、もし取り出せたとしても、これだけの連続使用に耐えられるとは思わない。

「仕方がない、わね…」

砂時計が止まり、この世界の時は凍った。

第六話「彼女と誓った、約束と」(前書き)

今回若干内容不足感があります、すみません…（^| ^;）

心情描写が難しい…

第六話「彼女と誓った、約束と」

——ある少女は、絶望の中に光を見た。

——ある少女は、絶望に吞まれ光を捨てた。

——ある少女は、絶望を払い光を求めた。

果たして、彼女らに希望は、光はあるのだろうか——

第六話「彼女と誓った、約束と」

——世界が、凍る。

今、此処は私だけの世界。
例え絶望に覆われようとも、きっと覆してみせよう。
それが、私の誓いだから。
きっと貴女を救ってみせる――

止まった世界の中、走る。
動く物は私だけ。
静寂に包まれた世界。

「まるで夢ね……」

そう、この一日で起こったことは、まるで夢の中のような出来事ばかりだ。
過去のループなど既に当てにならない。

かつてのループでは、筋道が逸れることはあったが、大半は変わらない事が普通だった。
だがこの時間軸はどうだ。

まるで異なる世界。
何処か人為的なものすら感じる程の異変。
一体、原因は何なのだろうか？

私の頭の中を思考のループが駆け巡る。

「っ、見つけた…」

考えている内に、まどかと別れた校舎に辿り着いた。
私は砂時計を動かし、階段に足を掛けた。

ふと教室から悲鳴。

「っ…」

今助けに行けば教室に残っている生徒は助かるかもしれない、だが
それでまどかが傷を負えば…

答えは二択。

行くか、行かないか。

私は、迷わず教室に走り出した。

何故なら、きっと「彼女」ならこうするから。

走りながら止まる砂時計。

凍りつく世界。

私はライフルを構え、教室に入っていた――

第七話「遅かったね、転校生」 (前書き)

2011 8/3 三点リーダー、及び行間など修正

第七話「遅かったね、転校生」

——それは、決して相容れぬ道

足掻く者、喰らうモノ。

死して尚、本能に従い動くカレラに——

「人」はただ喰われていく

それでも、僅かな光芒を探し続ける者を——

愚かだと言えるだろうか。

第七話「遅かったね、転校生」

走る、走る——

静止した世界の中を駆け抜ける。

早く、一瞬でも早く——

やがて扉の前に辿り着いた。

眼前の死者を屠り、扉を開く。

教室の中には、恐らく悲鳴の主であろう少女と、彼女を喰らおうと本能のまま歩み寄る死者。見ると、少女は肩に噛み傷があった。

——迷わず引き金を引いた。

タン、タンと二発の銃声。

「謝りはしないわ。

私は、進むしかないから——」

そして数瞬後、動き出した時の中其処には「死者」しか居なかった。

次々と死者を葬る。

ただ行く先を塞いだモノ。

ヒトを喰らっていたモノ。

かつて級友だったモノ。

簡単にそれを成す自分に、何の感傷も湧かないのは何故だろうか・

・

「繰り返した」のが理由かもしれない。

それとも他の理由？

考えても結論は出ない。

しかし、ただ一つだけ言えることがある。

私は、壊れかけている、と――

気が付けば、屋上の扉に辿り着いていた。
早く合流しなければ――

そう思い、扉を開く。

そこには――

「遅かったね転校生。

おかげで散々な目にあっただけのに……」

かつて見た『蒼い衣装』に身を包んだ少女と、
その背後に座り込む少女。

そして――

「遅かったね曉美ほむら。

僕としてもこの状況は想定外だったけど……

まあいいや。

それより彼女が新しく魔法少女になったんだ。

戦い方を教えてあげなよ。

それは僕の関与する範囲じゃ無いしね。」

孵卵器の名を持つ、白きモノ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4730t/>

繰り返して往く世界の中で(まどマギ×学園黙示録)

2011年10月9日03時52分発行